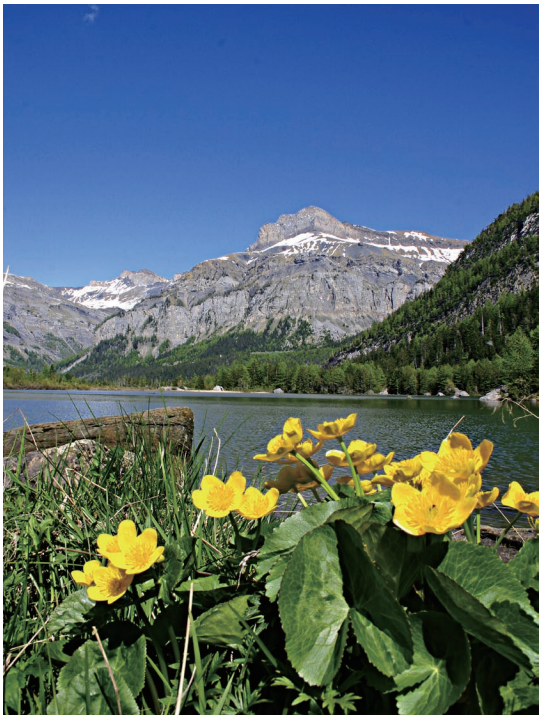
# 永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2020年 2月

「闘争と勇気」「生ける宮（1）」「一つであるように」「里芋のきんぴらお焼き」

# 永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

## 目次


今月の聖書勉強
生ける宮（I） 4
聖書の教え

朝のマナ
闘争と勇気 7
Conflict and Courage

現代の真理
「一つであるように」 37
わたしたちが信仰の一致に到達するまで

力を得るための食事
「里芋のきんぴらお焼き」 42
レシピ

お話コーナー
「ピラトによる有罪宣告（II）」 44
イエスの物語



【正丸教会】
〒368-0071　埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465

【高知集会所】
〒780-8015　高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】
〒905-2261　沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp
メール　sdarm.shomaru@gmail.com



発行日　2020 年 1 月 5 日
編集＆発行　SDA 改革運動日本ミッション
〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Dreamstime on Front page, Sermon View on page 44

Printed in Japan

# キリストの招き

助けを求めてキリストのところにきた人々の多くは、自分で病気を招いた人たちであったが、それでもイエスは、いやすことを拒まれなかった。イエスから力が出てこれらの人々に入ると、彼らは罪を自覚し、多くの者がその病気と共に心の病もいやされたのである。

カペナウムにいたひとりの中風の人はこういう人間のひとりだった。…この中風患者も、回復する望みを全く失っていた。その病気は罪深い生活の結果だったので、その苦しみは悔悟の念によって、いっそう、つらく感じられた。…

しかしそのとき彼はイエスのみわざについて聞いたのである。自分と同じように罪深いあわれな人々がいやされていたので、自分も救い主のところにつれて行ってさえもらえば、きっとなおるのではないかと考え、しかし、自分の病気の原因を考えると、またも望みは失われるのだが、いやされる機会をなげ捨てるわけにはいかなかった。

彼の大きな欲求は罪の重荷から救われることであった。そのため、イエスにお目にかかってゆるしの確証を得、天からの平安を得たいとせつに望んだ。このことが、かなえられれば、神のみ旨によって生きても死んでも満足だと思った。…

そこで彼は自分を床のままイエスのところにつれて行ってくれるように、友だちにたのむと、友だちは喜んでこれを引き受けた。…「ガリラヤやユダヤの方々の村から、またエルサレムからきたパリサイ人や律法学者たちが、そこにすわっていた」（ルカ 5:17）。…いのちの霊が集まった人たちの上をおおっていたが、パリサイ人や学者たちはそのご臨在に気がつかなかった。彼らは必要感を感じなかったのでいやしは彼らのためではなかった。「飢えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます」（ルカ 1:53）。…

イエスはこの苦しむ魂の切望をよく知っておられたのである。…イエスは、信仰の最初のかすかな光が成長してキリストが罪びとの唯一の助け主であるという信念に変って行くのを見守り、イエスのみ前にこようとする努力と共にさらにその信念が強くなって行くのを見ておられた。キリストご自身が、この苦しむ人をご自分に引き寄せられたのである。そのとき救い主は「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」とおっしゃった…

多くの人はこの不思議な事件のすべての動きを、息もつかずに興味をもって見ていた。多くの者は、キリストのみ言葉を、自分たちに対する招きと感じた。彼らの心は罪で病身になっていなかっただろうか。そしてこの重荷からのがれたいと熱望していなかっただろうか。（ﾐﾆｽﾄﾘｰ・ｵﾌﾞ・ﾋｰﾘﾝｸﾞ 48-50）

聖書の教え–現代の真理–

# 第 15 課　生ける宮（I）

新しい自動車や他の機器が市場に出ると、それには、どのように車を最適な状態に保つかについて指示が記載された製造業者の発行するメンテナンス用のマニュアルがついてきます。そのマニュアルによって購買者は、オイル交換のタイミング、使用すべきオイルの種類、冷却機のチェック方法、修理の方法等がわかります。その自動車を開発、製造し、何度もテストを行った製造業者は、その自動車を最適な状態に保つための方法を知っています。そのため、賢明な購買者は、製造業者の指示を注意深く守ります。

わたしたち一人一人は、生きた機械の取り扱いを委ねられてきました。その機械は自動車よりもはるかに複雑で入り組んでいます。その生きた機械とは、人の体です。わたしたちが目、耳、脳、心臓または他の体の器官について考え、分析するとき、わたしたちは創造主の無限の知恵に対する畏敬と敬意に満たされます。わたしたちは、ダビデと共に次のように叫ぶのです。

「わたしはあなたをほめたたえます。なぜなら、わたしは遅るべく、くすしく造られているからです。あなたのみわざはくすしく、あなたは最もよくわたしを知っておられます。 わたしが隠れた所で造られ、地の深い所でつづり合わされたとき、わたしの骨はあなたに隠れることがなかった。 あなたの目は、まだできあがらないわたしのからだを見られた。わたしのためにつくられたわがよわいの日のまだ一日もなかったとき、その日はことごとくあなたの書にしるされた。神よ、あなたのもろもろのみ思いは、なんとわたしに尊いことでしょう。その全体はなんと広大なことでしょう」（詩篇 139:14-17）。

知恵に満ちておられる神が、この驚くべき「機械」－わたしたちの体－を最も健康な状態に保つためのマニュアルを残してこられなかったでしょうか。いいえ、わたしたちにはマニュアルがあります。そして、病気、苦しみ、早死がこれほど多いのは、この書に書かれている指示に対する無知に大きく起因しているのです。わたしたちの造り主は、わたしたちの幸福、体、魂、精神のすべてに関心をもっておられます！「愛する者よ。あなたのたましいがいつも恵まれていると同じく、

あなたがすべてのことに恵まれ、またすこやかであるようにと、わたしは祈っている」（ヨハネ第三 2）。

次のように言う人が多くいます。「わたしの体はわたし自身のものであり、わたしは自分が好きなようにその体を扱うことができる」。確かに、わたしたちは好きなように扱うことができます。しかし、エンジンと同じように、それを乱用した場合は、まもなくどこかがおかしくなります。そして、修理をしてくれる製造業者を探すことになります。しかし、本当にわたしたちは自分自身の体を所有しているのでしょうか？

「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい」（コリント第一 6:19, 20）。

わたしたちは、二つの理由によりキリストに帰属しています。第一に、このお方はわたしたちを創造されました。そして第二に、このお方がカルバリーの十字架においてご自身の尊い血をもってわたしたちのために贖いの代価を支払われました。そのため、わたしたちは使徒パウロよりローマ人への手紙の中で次のように勧告されています。「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である」（ローマ 12:1）。

わたしたちは、自分の体を取り扱う方法について創造主に対し責任があります。そしていつかこのお方は、わたしたちを一人ずつ呼んで、会計報告を出すように言われるのです。「なぜなら、わたしたちは皆、キリストのさばきの座の前にあらわれ、善であれ悪であれ、自分の行ったことに応じて、それぞれ報いを受けねばならないからである。」（コリント第二 5:10）。

わたしたちの体は、聖霊が住むための宮となるよう意図されていました。

「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。 もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである。」（コリント第一 3:16）。

そのため、「メンテナンスのためのマニュアル」である聖書を注意深く研究し、

そこに書かれているすべての教えを守りましょう。これにより、わたしたちの体が神の宮となり、このお方のみ霊に満たされるためです。

**神の宮**

「だから、飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである。」（コリント第一 10:31）。

健康に関する最も重要な原則は、わたしたちが何事をするにも、それが食べることでも、飲むことでも、働くことでも、レクリエーションでも、眠ることでも、すべて自分たちの創造主に栄光を帰すためになすべきであるということです。決して不自然な食欲や低俗な欲望、不自然な欲求を満たすための利己的な願望が、わたしたちの行動の動機になってはなりません。抑制しないならば、そのような道は必ず病気や死に至ることになります。

「食物は腹のため、腹は食物のためである。しかし神はそれもこれも滅ぼすであろう。からだは不品行のためではなく、主のためであり、主は体のためである」（コリント第一 6:13）。

「彼らの最後は滅びである。彼らの神はその腹、彼らの栄光はその恥、彼らの思いは地上のことである。」（ピリピ 3:19）。

イエスは、万事においてわたしたちの模範であられます。このお方も食欲において誘惑されましたが、可能な限り最も困難な状況においてでした。しかし、このお方は勝利されました（マタイ 4:1-11 ご参照）。このお方は、わたしたち自身の食欲や願望に対して同様の勝利を得るためにご自分の力を約束してくださっています。

「すると試みる者がきて言った、『もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい』。 イエスは答えて言われた、『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書いてある」（マタイ 4:3, 4）。

イエスが直面された最初のテストと最初の勝利は、食欲に関するものでした。ちょうどアダムとエバが最初にテストされ、失敗したのと同様です。イエスは記された神のみ言葉をもって誘惑に対応されました。わたしたちもまた、「『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」と訓告されています（ヨハネ第一 2:6）。

# 闘争と勇気

*Conflict and Courage*

2 月

2月1日

# 箱舟建設

**「そこで神はノアに言われた、『わたしは、すべての人を絶やそうと決心した。彼らは地を暴虐で満たしたから、わたしは彼らを地とともに滅ぼそう。あなたは、いとすぎの木で箱舟を造り、箱舟の中にへやを設け、アスファルトでそのうちそとを塗りなさい』。」( 創世記 6:13，14)**

神は、箱舟の正確な大きさと、その建造上の指示を明確にノアにお与えになった。人知では、こうしたがんじょうで耐久性のある建造物を考案することは不可能であった。

神が設計家で、ノアが建築家であった。それは水に浮くように、船の形に造られてはいたが、ある面では家屋によく似ていた。……箱舟を建造するために用いられた材木はいとすぎの木で、それは、数百年たっても腐らないものであった。この巨大な建造物の工事は遅々として進まず、ほねのおれる仕事であった。( 人類のあけぼの上巻 90)

そのころ生きていた人類は非常に体格が良くすばらしい力を持っていた。木々は、現在人間が見ることのできるものよりはるかに大きく、並はずれて美しく完全に均整がとれていた。これらの木の材木は非常に堅くて強い、すなわち石のように堅い物質でできていた。建設用の材木を整えるのは、この並はずれた体力の人類にとってすら、この堕落した時代に、現代人が持っている弱々しい体力で、今地上に生えている木々を整える以上の時間と労力を要した。( 霊の賜物 3 巻 61)

材木の一本一本は綿密に組み立てられ、継ぎ目にはもれなく樹脂が塗られた。工事を完全なものにするためには、人間のなしうるかぎりのことがなされた。しかし結局は、神のみがその奇跡の能力によって、怒りさかまく波浪から舟を守ることがおできになるのである。

メトセラと息子、孫たちは箱舟を建設する時に生きていた。彼らは他の人々と共にノアからの教えを受け入れ、箱舟建設を手伝った。( 霊の賜物 3 巻 59，60)

ノアは、世に警告の使命を伝えるとともに、その行為によって、自分が真剣であることをあかしした。こうして彼の信仰は完成され、明白に示された。彼は、神が仰せになったことを、そのまま信じる模範を世に示した。彼は、全財産を箱舟につぎこんだ。……箱舟の槌音の一つ一つは、人々に対するあかしであった。( 人類のあけぼの上巻 92)

# 中は安全

**「主はノアに言われた、『あなたと家族とはみな箱舟にはいりなさい。あなたがこの時代の人々の中で、わたしの前に正しい人であるとわたしは認めたからである』。」(創世記 7:1)**

ノアは、神からの指示に忠実に従っていた。箱舟は、主のさしず通りにすべてのところが完成し、人間と動物の食糧が貯蔵された。そして、今、神のしもべは彼の最後の厳粛な訴えを人々にした。彼は、言葉では表現できない心の苦しさをもって、避難所があるうちに救いを求めるように訴えた。彼らは、またもや彼の言葉を退け、ののしりとあざけりの声をあげた。突然、あざける群衆は沈黙した。最もおとなしい動物も、最もどうもうな動物も、あらゆる種類の動物が一様に山や森から箱舟に向かって静かに進んでくるのが見えた。突風のような音が聞こえたので、見ると天を暗くするほどの多くの鳥類が四方から群がってきて、秩序正しく箱舟の中にはいった。人間は従わないのに、動物は神の命令に従った。(人類のあけぼの上巻 95)

動物が森から出てきて箱舟の扉のところに来て、ノアがそれらを中に入れるのを見た時、人々は神が自分たちに与えてこられたメッセージに対してあまりに長く抵抗し、拒否していたので、彼らの良心は麻痺してしまった。(手紙 108, 1896 年)

罪深い人類に対するあわれみの訴えはやんだ。野の獣と空の鳥は避難所に入った。ノアと彼の家族は、箱舟に入った。そして「主は彼のうしろの戸を閉ざされた」・・・・うち側にいる者では閉じることのできない巨大な扉が、目に見えない手で静かに閉ざされた。ノアは、内側に入れられ、神のあわれみを退けたものは閉め出された。その扉の上には、神の印が押された。神がそれをお閉めになった。だからただ神だけがそれをあけることがおできになるのである。そのように、キリストが天の雲に乗ってこられる前に、罪深い人間のためのキリストのとりなしは終わり、恵みの扉は閉ざされる。そうすると、神の恵みは、これ以上悪者を抑制しなくなるので、サタンは、恵みを退けた人々を完全支配する。彼らは、神の民を滅ぼそうとする。しかし、ノアが箱舟のなかに閉じこめられたように、義人は、神の力に保護される。(人類のあけぼの上巻 96)

2月3日

# 七日の後

**「こうして七日の後、洪水が地に起った。」( 創世記 7:10)**

ノアとノアの家族が箱舟にはいってから七日の間、暴雨がやってくるしるしはあらわれなかった。この間、彼らの信仰は試みられた。それは、外部の世界にとっては、勝ち誇った時であった。いかにも遅れているので、人々は、ノアの使命が惑わしであって、洪水は起こらないという考を強くした。……厳粛な光景を目撃したにもかかわらず、彼らはなお、遊戯や宴会を続け、こうした著しい神のカ現われさえも物笑いの種にした。彼らは、箱舟のまわりに群がって、内部にいる人々をあざけり、これまでになかったほどの乱暴を働いた。( 人類のあけぼの上巻 96，97)

七日目が終ろうとする時雲が出はじめた。これは新しい光景であった。というのも人々は雲を見たことがなかったからである。……まもなく雨が降り始めたが、これは別に警告などではないと、人々はまだ考えようとしていた。……しばらくの間地面は雨を吸い込んでいたが、まもなく水があふれはじめ、日毎に水かさが増していった。人々は雨が降り続くのを見て、憂鬱な気持ちで互いに見交わし、夜毎に「まだ降っている」という言葉を繰り返した。( ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1901 年 4 月 10 日 ) 人々はまず、自分たちの手のわざが破壊されるのを見た。豪華な建物や、彼らが偶像を安置した美しい庭園や林は、天からのいなずまによって破壊され、そのざんがいはここかしこに散らばっていた。……人間と動物の恐怖のさまは、表現することができなかった。暴風雨のとどろきを越えて、神の権威を軽視した人々の嘆きの声が聞こえた。……この恐怖のときに、彼らは神の律法に違反したことが自分たちの滅亡の原因であることを悟った。しかし、彼ら は刑罰を恐れて罪を認めたとはいえ、真に悔い改め、悪をきらったのではなかった。もし、刑罰が取り除かれたならば、彼らは、またもや神に反逆したことであろう。同様に、この世界が火で滅ぼされる前に地に下る刑罰のときに、悔い改めない者は自分たちの罪の正体を知り、それが、神の清い律法を軽視した罪であることを知るのである。しかしながら、古代の罪人と同様に、彼らは真に悔い改めるのではないのである。( 人類のあけぼの上巻 97，98)

2月4日

# ノアの時にあったように

**「そして、ノアの時にあったように、人の子の時にも同様なことが起るであろう。ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていたが、そこへ洪水が襲ってきて、彼らをことごとく滅ぼした。」( ルカ 17:26，27)**

神は、洪水前の人々が、飲み食いすることを非難されのではなかった。神は、彼らのからだの必要を満たすために、地の産物を豊富にお与えになったのである。彼らの罪は、与え主であられる神に感謝せずに、これらの賜物を受け、なんの抑制もなく食欲を満たして、堕落したことであった。彼らが結婚することは正当なことであった。結婚は、神が制定されたものである。これは、神が定められた最初の制度の一つであった。神は、この儀式に特別の指示を与え、それを神聖で美しいものとされた。しかし、人々は、こうした指示を忘れ、結婚を悪用して情欲を満たすものにした。 今日も同じ状態である。それ自身、正当なことが、過度に行なわれている。なんの制限もなく、食べたいだけ食べている。……情欲を制することが、自分たちの道徳的責任であることを感じない者が非常に多い。彼らは、情欲の奴隷になる。人々は感覚の快楽を求めて生き、この世界と現世のためだけに生きる。…… 霊感が示す洪水前の世界の状態は、現代の社会が急速に近づきつつある状態をあまりにもよく描写している。…… 洪水前の人々は、猶予の期間が終わろうとしていたとき、刺激的娯楽や祭りに熱中していた。勢力と権力をもった者は、人々の心を歓楽と快楽に夢中にさせておいて、最後の厳粛な警告にだれも心を動かすことがないようにしむけていた。( 人類のあけぼの上巻 101-103) 神は、洪水が来る前に、ノアをつかわして世界に警告を発し、人々を悔い改めさせて、切迫している破滅から彼らをのがれさせようとされた。キリスト再臨の時が近づくにつれて、主は、主のしもべたちを世界につかわして警告を発し、その大事件の準備をするように促される。群衆は、神の律法に逆らった生活をしてきた。そこで神は、彼らをあわれんで、清い戒めに従うように呼びかけられる。神に対して悔い改め、キリストを信じて、罪を捨てる者はみな許しが与えられる。( 同上 102)

2月5日

# 神は見るために来られる

**「彼らはまた言った、『さあ、町と塔とを建てて、その頂を天に届かせよう。そしてわれわれは名を上げて、全地のおもてに散るのを免れよう』。」( 創世記 11:4)**

ノアの子孫は、しばらくの間、箱舟が止まった山地に住んでいた。彼らの数が増加するにつれて、間もなく背信と分裂が生じた。創造主を忘れて、神の律法の制限から脱出しようと望んだ者らは、神を恐れる仲間の教えや模範を絶えずきらっていた。やがて、彼らは、神の礼拝者から分離することに決めた。そこで彼らは、ユフラテ河畔のシナルの平原に下った。……

彼らは、ここに都市を建設し、世界の驚異となるような巨大な高塔を建てることにした。‥‥

シナルの平原の住民は、この地上に再び洪水を起こさないという神の契約を信じなかった。彼らのなかには、神の存在を否定し、洪水は自然的原因によって起こったとするものが多かった。他の者は至高者を信じ、神が洪水前の世界を滅ぼしたことを信じていた。しかし、彼らの心は、カインと同様に神に反抗的であった。彼らが塔を建てた目的の一つは、もし、再び洪水が起こったならば、彼らの身の安全を確保するためであった。彼らは、その建造物を、水が達したところよりもはるかに高く築き上げて、どんな危険にも耐えられるようにしようと思った。そして、雲のある層にまで登れるから、洪水の原因をつきとめることもできるだろうと彼らは考えた。‥‥‥

現代にも塔の建設者がいる。無神論者はいわゆる科学的推論によって、彼らの学説を打ちたて、啓示された神の言葉を拒否する。……いわゆるキリスト教会の世界でも、多くの人々は聖書の明らかな教えから離れて、人間の推論や耳ざわりのよい作り話をもとにして教義をつくりあげている。そして、彼らは自分たちの塔が、天への道であると指さしている。‥‥

神の審判の時が近づいている。いと高き神は、人の子らが何を建てているのかを見るために来られる。彼の統治権は、明らかにされ、人間の高ぶりのわざは打ちくだかれる。( 人類のあけぼの上巻 114 − 120)

2月6日

# 混乱と離散

**「これによってその町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を乱されたからである。主はそこから彼らを全地のおもてに散らされた。」( 創世記 11:9)**

シナルの平原の住民は、神の栄光のためではなく、自己賞揚のために自分たちの王国を設立した。もし彼らが成功していたなら、強い勢力が正義を払いのけて新しい宗教を開始し支配権を握ったことであろう。世界は混乱していたであろう。……しかし神はご自分のための証人が居ないままに世界を放っておかれることは決してない。この時代にも神のみ前に身を低くし神に呼び求める人々がいた。「ああ神よ、あなたのみわざと、人間の計画や方法の間に介入してください」と彼らは嘆願した。( 教会への証 8 巻 113，114) 塔の一部が完成したとき、そのある部分が塔の建設者の住居に当てられた。他に、りっぱな調度品を置いて、飾られた部屋は、彼らの偶像にささげられた。…… 突然、これまで順調に進んでいた工事が止められた。建設者たちの意図をくじくために、天使が送られた。塔はすでに高くそびえて、上で働いている者が、下にいるものと直接話をすることはできなかった。それで、あちらこちらに人員が配置されて、必要な資材の注文や工事の指示などを下の者に取り次いだ。こうして、伝令が次々に伝わるうちに、言葉が乱れ、必要でない材料を注文したり、初めの指示とは全く反対の指示を伝えたりするようになった。混乱とろうばいが起こった。工事は全面的に停止した。…… この時まで、すべての人々が同じ言葉を話していた。しかし、こうなっては、お互いに言葉を理解し合うものだけがまとまって、それぞれ別れていった。「主が彼らをそこから全地のおもてに散らされた」( 創世記 11:8)。この離散は、広く地に人間を住ませるための手段であって、主はこのようにして、人々がその成就を妨げようとして取った方法そのものを用いて、ご自身の目的を果たされたのである。( 人類のあけぼの上巻 116，117) 今日、主はご自分の民が地にあまねく分散していることを望んでおられる。彼らは集落化すべきではない。イエスは「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」と言われた ( マルコ 16:15)。( 教会への証 8 巻 215)

2月7日

# 絶対的服従

**「信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った。」( ヘブル 11:8)**

アブラハムは、迷信と異教のなかで成長したのであった。神の知識を保っていた彼の父の家族でさえ、回りの魅力的感化に負けて、主より「ほかの神々に仕えて」いた。……

「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」と、神はアブラハムに言われた ( 創世記 12:1)。神が、アブラハムを清いみことばの擁護者としての偉大な任務にふさわしい者とするためには、まず、アブラハムを、彼の青年時代の仲間から引き離さなければならなかった。…

アブラハムの絶対服従は、全聖書を通じて見られる最も驚くべき信仰の例証の一つである。‥‥

アブラハムに臨んだ試練は、決して軽いものではなく、彼に要求された犠牲は、小さくはなかった。アブラハムは、故郷、親族、家庭と、堅いきずなで結ばれていた。しかし、彼は、ためらうことなく召しに従った。彼は約束の地が肥沃であるか、健康的気候なのか、また、そこは快適な環境で、富を蓄積する機会があるかなどは聞かなかった。神がお語りになったのであるから、神のしもべは従わなければならなかった。彼にとって、この地上で最も幸福な場所は、神が彼にいるようにお望みになるところであった。……

アブラハムのように、今日も、なお、多くの人々が試みを受ける。……

富と栄誉を約束する職業を捨てて、気の合った有益な仲間を離れ、親族と別れ、克己と困難と犠牲だけを要求するように思われる道に進むように要求されるであろう。神は、彼らに仕事をさせようとしておられる。‥‥

心に秘めた計画や親しい友との交わりを捨てて、神の摂理の召しに応じる者はだれであろうか。…

新しい任務を引き受け、働きが始められていない地に行き、堅い決心のもとに喜んで神のみわざに従事するのはだれであろうか。このようにする人は、アブラハムと同じ信仰を持っている。そして、彼は、「永遠の重い栄光を、あふれるばかりに」彼とともに受ける。「今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない」(コリント第二 4:17; ローマ 8:18)。(人類のあけぼの上巻 121 − 125)

2月8日

# 理由がある

**「こうして、あなたがたの信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いことが明らかにされ、イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに変るであろう。」(ペテロ第一 1:7)**

アブラハムは、南に旅を続けていった。そして、ふたたび、彼の信仰は試みられた。天から雨は降らず、谷間の小川の水は枯れ、平原の草はしぼんだ。家畜や羊の群れの牧草がなくなり、天幕全体の者が餓死しそうになった。さて、アブラハムは、神の摂理の導きを疑わなかっただろうか。豊かなカルデヤの平原に帰りたいと思わなかったであろうか。一同は、次々と苦難におそわれるアブラハムが、いったいどうするであろうかと、しきりに彼を見つめていた。人々は、アブラハムの確信がゆるぎさえしなければ、希望がもてると思った。‥‥

アブラハムは、神の摂理の導きを説明することはできなかった。彼は自分が期待していることを現実のものとしてはいなかった。しかし、「あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう」という約束を堅く信じた(創世記 12:2)。彼は、周囲の環境によって神のみ言葉に対する信仰が動かされるのを許さず、熱心に祈って、自分の家族と家畜の生命をつなぐ方法を考えていた。アブラハムは、ききんを避けるためにエジプトに下った。彼は、カナンを見すてたのではなかった。また困苦の末、食物にはことかかない故郷のカルデヤの地にもどろうとしなかった。彼は、約束の地にできるだけ近い所にしばらくのがれて、神が定められた場所に、間もなく帰るつもりであった。

主は、摂理のうちに、この試練を与えて、服従、忍耐、信仰などの教訓を教えようとなさった。‥‥

神は、神の民が試練に会うのを許される。それは、彼らが神に誠実を尽くし、服従することによって、彼ら自身が霊的に豊かになるためである。さらに、彼らの模範によって、他の人々に奨励を与えるためである。「主は言われる、わたしがあなたがたに対していだいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするもの」である(エレミヤ 29:11)。われわれの信仰を最もきびしく鍛え、神は、あたかもわれわれを見捨てられたのかと思わせるような試練そのものが、実は、われわれがすべての重荷を主のみもとにおろして、それに代えて彼がお与えになる平和を味わうことができるように、われわれをキリストのそば近くに導くべきである。(人類のあけぼの上巻 126 − 128)

2月9日

# 神はご自分のものを守られる

**「主は人の彼らをしえたげるのをゆるさず、彼らのために王たちを懲らしめて、言われた、『わが油そそがれた者たちにさわってはならない、わが預言者たちに害を加えてはならない』と。」( 詩篇 105:14，15)**

神は、綿密なきびしい試練によって、そのしもべたちを訓練なさる。神は、ある人が神のみわざの進展のために役立つ能力を持っているのを見られて、そのような人々をためされる。神は、摂理のうちに、彼らの品性をためす地位に彼らをおいて、彼ら自身でも気づかなかった欠点や弱点をあらわされる。神は、彼らがこれらの欠点を直して、奉仕にふさわしいものになる機会をお与えになる。神は彼ら自身の弱さを示して、神に頼ることをお教えになる。なぜならば、神が彼らの唯一の援助者であり、保護者だからである。こうして、神の目的は達成される。彼らには、大目的達成のための教育、訓練、鍛練、準備などが与えられる。彼らの力は、そのために与えられたのである。……

アブラハムは、エジプトに滞在していた間に、彼がまだ人間的に弱く、不完全であるという証拠をあらわした。彼は、サラが妻であることを隠して、神の守護に対する不信を示し、これまで彼の生涯において何度となくりっぱに示されたあの大いなる信仰と勇気を欠いたのである。……サラが、父の娘ではあったが、自分の母の娘ではなかったので、自分の妹だと言っても、うその罪にはならないと考えた。しかし、ふたりの間の真の関係をこうして隠したことは欺瞞であった。全く正直であることから少しでもそれることを神は許されない。アブラハムの信仰が欠けていたために、サラは大きな危険にさらされた。エジプトの王は、彼女の美しさを聞いて、宮廷に召し入れ、彼女を妻に迎えようとした。しかし、主は、王家に刑罰を下し、大きなあわれみをもってサラを守られた。……

パロに与えられた警告は、その後のアブラハムの異邦人との交際を保護するものとなった。…アブラハムが礼拝する神は、そのしもべを守り、彼に危害が加えられるならば、報復なさることが明らかにされた。天の王の子らのひとりに悪を行なうことは危険である。( 人類のあけぼの上巻 128 － 130)

# 平和を保つ

**「『わたしたちは身内の者です。わたしとあなたの間にも、わたしの牧者たちとあなたの牧者たちの間にも争いがないようにしましょう。全地はあなたの前にあるではありませんか。どうかわたしと別れてください。あなたが左に行けばわたしは右に行きます。あなたが右に行けばわたしは左に行きましょう』。」(創世記 13:8，9)**

アブラハムは、「家畜と金銀に非常に富んで」カナンに帰った。ロトも彼といっしょにいた。彼らは、ふたたびベテルに来て、以前に築いた祭壇のそばに天幕を張った。やがて彼らは、財産が増すにつれて悩みも増すことに気づいた。彼らは、困難と試練のただなかにあっては仲よくいっしょに住んだのであるが、繁栄すると彼らの間に争闘の危険があった。牧草は、両方の家畜と群れを養うには十分ではなかった。……彼らが別れなければならないことは明らかであった。アブラハムは、ロトよりも年長で、財産や地位においてもすぐれていた。それでも、アブラハムが最初に平和維持の案を提出した。全地は、神がアブラハムに与えられたものであった。しかし、彼は、穏やかにその権利を譲るのであった。……

ここに、アブラハムの高潔、無我の精神があらわされた。これと同様の立場におかれたとき、なんと多くの人々が、自分の権利や優先権を主張してやまないことであろう。こうして、どれほど多くの家庭が破壊されたことであろう。どれほど多くの教会が分裂して、真理の働きが悪人たちの侮蔑と物笑いの種になったことであろう。「わたしとあなたの間にも……争いがないようにしましょう」。親族関係だけでなくて、真の神の礼拝者でもあるから、「わたしたちは身内の者です」とアブラハムは言った。全世界の神の子らは、一つの家族である。そして同じ愛と融和の精神が彼らを支配しなければならない。「兄弟の愛をもって互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい」とわれわれの救い主はお教えになった(ローマ 12:10)。だれにでも礼儀正しくすることを身につけ、人々からしてほしいと思うことを、喜んで人々にするならば、人生の不幸の半分はなくなってしまうことであろう。自己誇張は、サタンの精神である。しかし、キリストの愛を心に持つものは、自分の利益を求めない愛をもつようになる。そうした人は、「おのおの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい」という勧告を心にとめるべきであろう(ピリピ 2:4)。(人類のあけぼの上巻 131，132)

2月11日

# ソドムに

**「アブラムはカナンの地に住んだが、ロトは低地の町々に住み、天幕をソドムに移した。ソドムの人々はわるく、主に対して、はなはだしい罪びとであった。」(創世記 13:12，13)**

パレスチナ全土のなかで、ヨルダンの谷は、最も地味が豊かな地域で、‥‥そこには、また、豊かで美しい都会があって、そのにぎやかな市場では、商売が繁盛しそうに思われた。ロトは、世的利益の幻に目がくらみ、そこで当面する道徳的、霊的害悪を見落としていた。……「ロトはヨルダンの低地をことごとく選びとって」「天幕をソドムに移した」(創世記 13:11，12)。ロトは、この利己的選択の恐ろしい結果については、なんの予測もしなかった。(人類のあけぼの上巻 132，133)

ロトは現世的な見地からそこに様々な利点が得られるのを見て、自分の住居としてソドムを選んだ。しかし彼が落ち着き、世俗的な富を得たのち、彼は自分の住居のある地域の道徳的環境が悪いことがわかり、選択を誤ったことを悟った。

ソドムの住民は堕落していた。日毎に下劣な会話を耳にし、ロトの正しい心は、自分に防ぐ力のない暴力や犯罪に悩まされた。彼の子供たちは、自分たちの道徳心を正道からそらす悪い人々と交際したので、その人々のようになった。これらのことをすべて考えると、彼が得た世俗的な富は子供たちのために支払った値に比べて価値がないように思えた。彼の子供たちはソドムの住民と結婚したので、彼の親戚は広範囲にわたっていた。ついに主の怒りがこの邪悪な町の住民に対して燃えたち神の御使いはロトを連れ出すためにソドムを訪れた。彼は町が破壊する中で滅びるべきではなかったからである。(教会への証 4 巻 110)

もし、彼が、初期に、アブラハムから忠実に教え込まれていなかったならば、彼の妻の感化と罪悪の町の交友とによって、神から離れていたことであろう。ロトの結婚とソドムに住宅を選んだことは、その後、数世代にわたってこの世界に起こった一連の不幸なできごとの出発点となった。(人類のあけぼの上巻 185，186)

男女を都市に魅きつけることがサタンの目的であり、自分の目標を達するために彼はあらゆる種類の目新しいものや娯楽、またあらゆる種類の刺激的なものを発明する。そして現代、地上にある都市は洪水前の町々のようになってきている。(ｾﾚｸﾃｯﾄﾞ・ﾒｯｾｰｼﾞ 2 巻 355)

2月12日

# 神が祝福される家庭

**「わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである。これは主がかつてアブラハムについて言った事を彼の上に臨ませるためである。」(創世記 18:19)**

神の御目に人はその家族の中にいるとおりの人である。神の友、アブラハムの生活は主のみ言葉に対する絶対的な尊重がきわだっていた。彼は家庭における宗教を育成した。神を畏れることが家族全体に浸透しており、彼は家の祭司であった。彼は自分の家族を神聖な委任された者と見なした。彼の家族全体は千人以上おりアブラハムはその人々をみな両親も子供たちも神なる統治者へ導いた。彼は一方では親の圧迫を容認せず、またもう一方では子供の不服従も黙認しなかった。愛と正義の混じりあった感化によって、アブラハムは神を畏れつつ自分の家族全体を治め、主は彼が忠実であることを証言された。(手紙 144，1904 年)

「彼は自分の家族……に命じる。」彼は自分の子供たちの悪い性癖を抑えることに対して罪深い怠慢を犯すことなく、弱々しかったり愚かでもなく、えこひいきもせず、誤った愛情のままに義務をおろそかにすることもなかった。アブラハムは正しい教えを与えるだけではなく、正義の権威と義の律法を権持しようとした。 今日この模範に従う者がなんと少ないことであろう。あまりにも多くの親の側で、盲目的なまた利己的な感傷主義があり、子供たちを、自分の意志を抑制するのに未熟な判断力と抑えることをしない激情のままに放っている。これは青年にとって最も残酷なことであり、世界に対する大きな悪である。両親の怠慢は家族や社会における無秩序の原因となる。これにより、神のご要求に従うかわりに、生来の傾向のまま行動したいという望みが若い人々の心に強まる。(原稿 22，1904 年) 親も子供も同様に神に属しており、治めていただくべきである。愛情と権威を結合させて、アブラハムは自分の家庭を治めた。神のみ言葉は私たちを導くための規則をわたしたちに与えている。これらの規則は、もしわたしたちが主の道を歩み続けたいのなら、それることのできない原則となる。神のみ旨が最高位を占めなければならない。わたしたちがなすべき質問は、「他の人は何をしたか。私の親戚どう思うか。」あるいは「わたしがこの方針を続けるなら、彼は何と言うだろうか」ではなく、「神は何と言われたか」でなければならない。親も子供も主の方法以外のどの方針でも真に成功することはできない。(教会への証 5 巻 548)

2月13日

# 旅人をもてなす

**「旅人をもてなすことを忘れてはならない。このようにして、ある人々は、気づかないで御使たちをもてなした。」( ヘブル 13:2)**

神は、アブラハムに大きな名誉をお与えになった。天使が友だち同志のように彼と歩き、語った。ソドムに神の刑罰が下されようとしたときも、その事実が彼にはかくされなかった。そして、彼は、罪人のために、神にとりなす者となった。彼と天使たちとの出会いは、美しいもてなしの模範である。( 人類のあけぼの上巻 140) わたしたちは、創世記の中に暑い夏の真昼にマムレの樫の木陰にある天幕の入口に座っている父祖を見る。三人の旅人が近づいてくる。彼らはもてなしを求めたり好意を請い求めないが、アブラハムは彼らが元気を回復しないまま道を歩み続けることを許さない。アブラハムは年をとっており、威厳と富があって、高い栄誉を受けており、命令することになれているけれども、この旅人を見て「天幕の入り口から走って行って彼らを迎え、地に身をかがめ」た。長と思える人に向って「わが主よ、もしわたしがあなたの前に恵みを得ているなら、どうぞしもべを通り過さないでください」と言った ( 創世記 18:2，3)。アブラハムは、彼らがちりによごれた足を洗うために自分で水をくんできた。自分で旅人の食事を選び彼らが涼しい木陰で休んでいる間に、彼の妻サラは彼らをもてなす用意をした。そしてアブラハムは、客が食事をしている間、そのそばにかしこまって立っていた。彼はこの親切を、自分のところへ二度と来ないはずの通りすがりの単なる旅人に示した。しかしもてなしが終ったとき、この客の真の性格があらわされた。アブラハムは天のみ使いに仕えたばかりではなく、栄誉にみちた天使たちの司令官、自分の創造主であり贖い主である王に仕えたのであった。そしてアブラハムに対して天の意図が明かされ、彼は「神の友」と呼ばれたのである。…… アブラハムとロトに与えられた特権はわたしたちにも与えられている。わたしたちも神の子らに親切なもてなしをすることによって、自分たちの住居に神の天使を受け入れることができるのである。今日ですら、人間の姿をした天使が人々の家庭に入り、もてなしを受けている。そして神のみ顔の光のうちに生きるクリスチャンは、常に目には見えない天使に付き添われており、天使はわたしたちの家庭に祝福を残していくのである。( 教会への証 6 巻 341，342)

# ソドムに対する秒読み

**「アブラハムは近寄って言った、『まことにあなたは正しい者を、悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。……正しい者と悪い者とを一緒に殺すようなことを、あなたは決してなさらないでしょう。……全地をさばく者は公義を行うべきではありませんか』。」(創世記 18:23，25)**

アブラハムは、神を尊んだ。それで、主も彼を尊び、神の会議に彼を加えて、みこころを彼にあらわされた。「わたしのしようとする事をアブラハムに隠してよいであろうか」と主は言われた。……

信仰のあつい彼は、ソドムの住民のためにとりなした。彼は、剣によって彼らを救ったことがあるが今度は祈りによって彼らを救おうとした。‥‥彼は深い尊敬と謙虚な心で訴えた。……彼は、自分自身罪人であるが、罪人のために哀訴した。神に近づく人々は、すべてこのような精神をもたなければならない。アブラハムは、愛する父親に訴える子供のような確信をあらわした。彼は、天の使者のそばに近づいて熱心に訴えた。

ロトは、ソドムの住民にはなったけれども、彼は、住民の罪に参加していなかった。アブラハムは、人口の多いこの町に、真の神の礼拝者がほかにもあるにちがいないと思った。‥‥アブラハムは一度だけでなく何度も願った。願いが聞かれるにつれて大胆になり、もし、十人の義人がソドムにいたならば、町は救われるという確証をついに得た。

アブラハムは、滅亡にひんした魂への愛に動かされて祈った。彼は、腐敗したソドムの町の罪はきらったが、罪人が救われることを願った。アブラハムがソドムのために抱いた深い関心は、われわれが悔い改めていない人々に対して感じなければならない切実な思いを示している。われわれは、罪を憎まなければならないが、罪人には、あわれみと愛を持たなければならない。

われわれの回りには、ソドムにのぞんだのと同じように、希望なく恐ろしい破滅に陥っている魂がある。毎日、だれかの恵みの期間が閉じている。毎時間、だれかが恵みのとどかないところへ移っていく。それなのに、恐ろしい運命をさけるように罪人に訴え、警告する声はどこにあるのだろうか。罪人を死から引き返すためにどこに救いの手がさしのべられているだろうか。けんそんに、しかも忍耐強い信仰をもって、罪人のためにとりなす人はどこにあるだろうか。(人類のあけぼの上巻 141-143)

2月15日

# 安全でない街

**「そのふたりのみ使は夕暮にソドムに着いた。そのときロトはソドムの門にすわっていた。ロトは彼らを見て、立って迎え、……言った、『わが主よ、どうぞしもべの家に立寄って足を洗い、お泊まりください』。」( 創世記 19:1，2)**

アブラハムの甥ロトはソドムに住居をかまえていたけれども親切ともてなしという父祖の精神を吹き込まれていた。夕暮れどきに二人の旅人が町の門にいるのを見、またこの邪悪な町では必ずこの二人に危険がつきまとうことを知っていたので、ロトは二人を自分の家に連れて行くと言って譲らなかった。彼は自分と自分の家族にふりかかるはずの危難については何も考えなかった。危険に陥っている人を守り、家のない人の世話をすることは、彼の生涯の仕事の一部であった。そして二人の見知らぬ旅人に親切にしたその行為は天使を自分の家に連れていったのである。ロトが守ろうと思っていたその人々が彼を守った。彼は夕暮れどきにこの二人を安全のために自分の家に連れて行き、明け方この二人はロトとその家族を、運命の決まった町の門から安全のために連れ出したのであった。( 教会への証 6 巻 342)

ロトは、彼らがどのような人々であるかは知らなかったが、ていねいに人をもてなすことは彼の習慣であった。それは、彼がアブラハムの模範から学んだ教訓であって、彼の宗教の一部であった。もしも彼が、礼儀正しい精神を養っていなかったならば、彼はソドムの他の者たちとともに滅びてしまったことであろう。多くの家庭は、旅人に戸を閉ざして、祝福と希望と平和をもたらす神の使者をしめ出している。

人生の行為は、それがどんなに小さいものであっても、みなよいことか、悪いことにかかわりがある。一見、最小と思われる義務を忠実に果たすか、怠るかによって、人生の最大の祝福か、最大の不幸かへの門を開くことになる。品性をためすのは、小事である。神が喜ばれるのは、快く進んで行なう日常のごく自然な自己否定の行為である。われわれは自己のためでなく、他の人々のために生きなければならない。自分を忘れ、人を助けるやさしい精神を心にいだいてこそはじめて、自分たちの人生を祝福とすることができる。ちょっとした心づかいや小さい飾りけのない思いやりの行為が、人生の幸福を構成する大きな部分を占めている。そして、これらをおろそかにすることが、人生を少なからず悲惨なものにしている。( 人類のあけぼの上巻 166，167)

# 最後の夜

**「また、ソドムとゴモラの町々を灰に帰せしめて破滅に処し、不信仰に走ろうとする人々の見せしめとし、」(ペテロ第二 2:6)**

平原の町々を焼き尽くした炎は、われわれの時代にまで警告の光を投げている。神は、罪人をあわれみ、長く忍ばれる。しかし、人間はある定められたところ以上に罪を犯し続けることはできないという恐ろしく厳粛な教訓が教えられた。その限界に達するときに、あわれみの招きは取り去られて、刑罰のわざが始まる。

世の贖い主は、ソドム、ゴモラを滅ぼした罪よりもっと大きな罪があると言われた。罪人に悔い改めを促す福音の招待を聞きながら、それを心にとめないものは、シデムの谷間の住民以上に神の前に罪深いのである。そして、神を知り、その律法を守っていると公言しながら、その品性や日常生活において、キリストを拒む者の罪はさらに大きい。ソドムの運命は、……天からの光と特権を軽んじるすべての人々に対する厳粛な訓戒であると救い主は警告された。(人類のあけぼの上巻 172, 173)

神の裁きが間もなく地上に注がれねばならない。「逃れて、自分の命を救いなさい」というのが神のみ使いたちからの警告である。別の声が「動揺するな。特に恐慌に陥るような原因はない」と言っている。罪を犯す者にすみやかな破滅が下ると、天が宣言している間に、シオンでくつろいでいる人々は「平和だ無事だ」と叫ぶ。青年や軽薄な者、また快楽を愛する者はこれらの警告を根拠のない作り話だと考え、冗談としてしりぞける。両親はこれらのことに対して自分たちの子供はおおむね正しいと思う傾向があり、みな安心して眠る。ソドムとゴモラが火で焼き尽くされた時、古い世界の滅亡にあたってはこのようであった。破滅の前夜、この平原の町々は快楽に大騒ぎをしていた。ロトは彼の恐れと警告を発したためにあざけられた。しかし炎の中で滅びたのはあざ笑った人々であった。その夜、ソドムの邪悪で不注意な住民に、恵みの扉が永久に閉ざされた。(教会への証 5 巻 233, 234) ロトにソドムを去るようにと警告したその同じ声が、わたしたちに「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ。……そして汚れたものに触れてはならない」と言われる(コリント第二 6:17)。この警告に従う者は避難所を見出す。(ｾﾚｸﾃｯﾄﾞ・ﾒｯｾｰｼﾞ 2 巻 354)

2月17日

# 忘れてはならない

**「ロトの妻のことを思い出しなさい。」( ルカ 17:32)**

避難者のひとりが、ふり向いて滅びの町を見たために、神の刑罰の記念碑になった。もしロトが、ためらうことなく天使の警告に従い、嘆願や抗議をしないでけんめいに山地をさして逃げていたならば、彼の妻ものがれたことであろう。ロトは、彼自身の模範によって、彼女を罪と滅びから救うことができたのであった。しかし、彼のためらいと遅延が、彼女に神の警告を軽視させた。彼女のからだは平原に来ていたが、彼女の心はソドムに執着していて、それとともに滅びた。彼女は、持ち物や子供たちまでが神の刑罰にのまれてしまうので、神に反逆の精神をいだいた。彼女は罪悪の町から救い出されて大きな恵みをこうむったが、長年かかって蓄積した富を、そのまま残して灰にしなければならないことを、きびしい取り扱いだと感じた。彼女は、救いを感謝して受けるかわりに、神の警告を拒んだ人々の生活をしたって、あえて後ろを振り向いた。彼女の罪は、彼女が生きる価値を持っていないことを示した。彼女は、助けられていることになんの感謝もあらわさなかった。

われわれは、神がわれわれを救うために、恵み深くもとられる方法を軽々しく扱わないように注意すべきである。「わたしの配偶者や子供がいっしょでなければ、わたしは救われたくない」というクリスチャンがある。彼らは、愛する者たちがいなければ、天国は、天国でないと感じる。しかし、神の大いなる恵みとあわれみを考えると、こういう感情の人は自分自身と神との関係について、正しい観念をもっているといえようか。彼らは、愛と誉れと忠誠という最も強いきずなによって、創造主とあがない主の奉仕に結ばれていることを忘れたのであろうか。あわれみの招きは、すべてに与えられた。そして、友人が救い主の愛の訴えを拒むからといって、われわれも顔をそむけるのであろうか。魂の贖罪は尊いことである。キリストは、われわれの救いのために無限の代価を払われた。そして、この大犠牲の価値、また魂の価値を認めるものは、他の人々があなどるからといって、神の恵みの申し出を軽んじないのである。( 人類のあけぼの上巻 171，172)

2月18日

# もっと良いふるさと

**「しかし実際、彼らが望んでいたのは、もっと良い、天にあるふるさとであった。だから神は、彼らの神と呼ばれても、それを恥とはされなかった。事実、神は彼らのために、都を用意されていたのである。」( ヘブル 11:16)**

ロトはソドムに移ったとき、自分を罪悪から守り、家族を自分に従わせる堅い決心であった。しかし、彼は、明らかに失敗した。……

今日も同様のまちがいをくりかえす者が多い。·……子供たちは誘惑にかこまれる。そして、彼らは敬虔の念を養い、正しい品性を形成するには不利な友人を持つ場合が多い。低い道徳観念、不信仰、宗教に関する無関心などの雰囲気は、親の感化を中和させる傾向がある。親や神の権威に対する反抗の実例は、常に青年たちの前にある。多くの者は、無神論者や未信者と親しくなり、神の敵と運命をともにする。

神はわれわれが住宅を選ぶとき、自分たちと家族をとりまく、道徳的、宗教的感化を、まず考慮することを望まれる。希望する環境を持つことができない者が多いから、われわれは苦しい立場に立たされる。もし、われわれが、キリストの恵みにたより、目をさまして祈っているならば、どのような所に召されても、神は、われわれを汚れに染むことなく立たせてくださるのである。しかし、クリスチャン品性の形成に不利な環境に、わざわざ身をさらしてはならない。……

子供たちの永遠の幸福を犠牲にして、世の富と名誉を彼らに与えようとする者は、ついに、これらの利益が恐ろしい損失であることに気づくのである。多くの者は、ロトのように、子供たちを失い、自分の魂を救うことがせいいっぱいであったことを知るであろう。彼らの生涯の事業は失われ、彼らの一生は悲しい失敗である。もしも彼らが真の知恵を働かせていたならば、世的財産は少なくても、永遠の嗣業の獲得権を確保したことであろう。

神がその民に約束された嗣業は、この世のものではない。……

われわれも「もっと良い、天にあるふるさと」を獲得しようと思うならば、この地上で旅人、また寄留者の生活をしなければならない。( 人類のあけぼの上巻 177-180)

2月19日

# 惜しいものはない

**「信仰によって、アブラハムは、試錬を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。……彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。」( ヘブル 11:17-19)**

神は、アブラハムを信仰の父として召されたのであるから、彼の生涯は後世の人々の信仰の模範となるべきであった。しかし、彼の信仰は完全ではなかった。彼はさきに、サ ラが妻であることを隠し、こんどはハガルと結婚して神への不信を示した。神は、彼が最高の標準に達するために、これまでまだだれも召されたことのないきびしい試練に彼を会わせられた。( 人類のあけぼの上巻 153) 主は彼に、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れて……彼を燔祭としてささげなさい」と言われた。老人の心は恐怖に黙して耐えた。病気で、こうした息子を失うことは、慈愛深い父親にとって胸のはりさける思いであろう。 それは彼の白髪を悲嘆にくれさせることであろう。しかし今、彼は自分の手で息子の尊い血を流すようにと命令されている。それは彼にとって恐ろしい、不可能なことに思えた。しかし神が語られたのであるからそのみ言葉に従わなければならなかった。アブラハムは年老いていたが、それを理由に義務を免れようとはしなかった。彼は信仰という杖を握りしめ、物も言えないほどの苦痛にさいなまれながら、若者特有のバラ色に輝く健康な自分の子供の手をとって、神のみ言葉に従うために出かけた。…… アブラハムは、もしイサクが殺されたなら、神のみ約束はどうやって成就されるのかという疑問を持とうとはしなかった。彼は自分の痛む心に思いを向けようとはしないで、ちょうど刃物が子供の震えている体に刺しこまれるその瞬間まで、神のご命令をその言葉通りに行った。そして「わらべに手をかけてはならない。」「あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を畏れる者であることをわたしは今知った」というみ言葉が与えられた。( 教会への証 4 巻 144，145) アブラハムの信仰によるこの行為はわたしたちの益のために記録されている。それは神がわたしたちに要求されることは、たとえ自分にとって身を切られるほどのことであっても信頼して従うという大きな教訓を教える。そして子供たちには、両親と神への完全な服従を教えるのである。アブラハムの従順によって、わたしたちは神に捧げるのに惜しいものは何一つないことを知る。( 同上 3 巻 368)

# 妻を選ぶ

**「あなたはわたしが今一緒に住んでいるカナンびとのうちから、娘をわたしの子の妻にめとってはならない。あなたはわたしの国へ行き、親族の所へ行って、わたしの子イサクのために妻をめとらなければならない。」( 創世記 24:3，4)**

アブラハムは、彼のむすこの周囲にある腐敗的感化の影響を恐れた。アブラハムの、いつもながらの神への信仰と神のみこころへの服従は、イサクの品性に反映されていた。しかし、イサクは愛情が強く、柔和で、人に譲歩する性質もあった。もし彼が神をおそれない人と結ばれるとすれば、一致を保つために原則を犠牲にするという危険があった。アブラハムにとって、むすこに妻をめとることは重大なことであった。アブラハムは、彼を神から引き離すことをしない人と結婚させたいと心から願っていた。‥‥

アブラハムは、カインの時代から彼の時代までの、神を恐れる者と恐れない者との結婚がどんな結果に終わるかをよく知っていた。彼自身とハガルとの結婚の結果、また、イシマエルやロトの結婚関係の結果を、彼は目の前に見ていた。アブラハムとサラの信仰が欠けていたために、イシマエルが生まれ、義人の種族が神を敬わない者と混じった。父の子に及ぼす影響は、偶像礼拝者である母親の側の親族と、イシマエルがめとった異邦の妻たちによってその力をそがれた。……

ロトの妻は利己的で、宗教心のない女であった。そして、彼女は、自分の夫をアブラハムから離れさせようとした。ロトは、彼女さえ望まなければ、賢明で神を恐れるアブラハムの勧告も聞けないソドムにとどまっていたくなかった。……

神を恐れる者が、神を恐れない者と結合すれば必ず危険が伴う。「ふたりの者がもし同意しなかったなら、一緒に歩くだろうか」( アモス 3:3 英語訳 ) 。結婚関係の幸福と繁栄は、ふたりの和合にかかっている。しかし、信者と未信者の間には、趣味、傾向、目的などに根本的相違がある。彼らは、ふたりの主人に仕えている。彼らの間に一致はあり得ない。どんなに純粋で正しい原則を持っているとしても、信者でない伴侶は、神から引き離す傾向を持っている。‥‥‥

「不信者と、つり合わないくびきを共にするな」と主は命じられる ( コリント第二 6:14，17，18)。( 人類のあけぼの上巻 181 － 186)

2月21日

# 幸せな結婚

**「天の神、主はわたしを父の家、親族の地から導き出してわたしに語り、わたしに誓って、おまえの子孫にこの地を与えると言われた。主は、み使をあなたの前につかわされるであろう。あなたはあそこからわたしの子に妻をめとらねばならない。」(創世記 24:7)**

イサクは、世界の祝福となる約束の相続人となり、神から大きな栄誉を受けた。しかし、彼が四十才のとき、経験豊かで神を恐れるしもべに命じて、彼の妻を選ばせるという父の判断に従った。聖書は、この結婚が愛に満ちた幸福な家庭を築いたことを美しく描いている。「イサクはリベカを天幕に連れて行き、リベカをめとって妻とし、彼女を愛した。こうしてイサクは母の死後、慰めを得た。」

イサクの歩いた道と、現代の青年たち、またクリスチャンと自称する人々でさえ追い求めている道とは、なんと異なっていることであろう。青年たちは、だれを愛そうと、それは自分だけで決定すればよく、神や親たちからはなんの支配も受けることではないと考えやすい。‥‥こうして現世の幸福と永遠の生命の希望を破壊した人が多い。……

親たちは、子供たちの将来の幸福について責任があることを忘れてはならない。イサクが父の判断を尊重したことは、彼が、服従の生活を愛するように訓育された結果であった。アブラハムは、子供たちに、親の権威を尊重するように教えたが、彼は日常生活において、その権威が利己的または独裁的支配ではなくて、愛に基づき、彼らの福利と幸福を考慮したものであることを示した。(人類のあけぼの上巻 186，187)

もし注意深く考慮し、年配の経験豊かな人々の勧告を求めるべき問題があるとすれば、それは結婚問題である。もし、聖書の勧告を必要とし、祈りのうちに神の指導を求めるべきときがあるとすれば、それは、一生を結合する段階にはいる前である。(同上 187)

2月22日

# あなたの宗教を示しなさい

**「それは、あなたがたが責められるところのない純真な者となり、曲った邪悪な時代のただ中にあって、傷のない神の子となるためである。あなたがたは、……彼らの間で星のようにこの世に輝いている。」( ピリピ 2:15)**

アブラハムは、周囲の国々から、偉大な族長、賢明で力ある首長として尊敬された。彼は、隣人に自分の感化を及ぼさないようにはしなかった。彼の生活と品性は、偶像礼拝者たちと著しく異なっていて、真の信仰の非常によい感化を及ぼした。彼の神への忠誠は不動のものであるとともに、彼の親しみやすさと情深さは、人々の信頼と友情をかち得、彼の飾らない偉大さは、尊敬と栄誉を受けた。

アブラハムは、宗教をひそかにしまっておいて、所有主がひとりで楽しむ秘宝のようなものだとは思わなかった。真の宗教は、そのようにしまっておけるものではない。そのような精神は福音の原則に反する。キリストが心のなかに住んでおられるなら、彼の臨在の光をかくすことも、あるいは、その光が暗くなることもあり得ない。

かえって、魂にかかる自我と罪の霧が、義の太陽の明るい光に照らされて、日ごとに消されていくにつれて、ますます輝きを増すことであろう。

神の民は、地上の神の代表者である。神は、この世界の道徳的暗黒のなかで、彼らが光になることを望まれる。彼らは、全国の都市や村々に散在した神の証人であって、神は、彼らを通して、神のみこころと神の驚くべき恵みの知識を不信の世界にお伝えになる。大いなる救いにあずかった者がすべて、主のための伝道者になるように神は計画された。クリスチャンの敬神深さを標準にして、世の人々は福音を評価する。忍耐強く試練に耐え、感謝して祝福を受け、柔和、親切、あわれみ、愛を習慣的にあらわすことなどが、世の人々の前で、品性から輝き出る光であって、生まれつきのままの心の利己心から出る暗黒との相違を示す。( 人類のあけぼの上巻 133，134)

2月23日

# 異なった双子

**「さてその子らは成長し、エサウは巧みな狩猟者となり、野の人となったが、ヤコブは穏やかな人で、天幕に住んでいた。」( 創世記 25:27)**

イサクのふたごのむすこ、ヤコブとエサウは、その性質も、生活ぶりも著しく異なっていた。……

エサウは、自分を楽しませることを好み、ただ現在のことばかりに心を奪われて成長した。彼は、束縛に耐えられず、自由奔放な狩りを楽しみ、早くから猟師の生活を選んだ。しかし、彼は父親の気に入っていた。物静かで、平和を愛する牧羊者は、長子の勇気と活気に心をひかれた。エサウは、恐れることなく、山やさばくを歩き回って、父親に獲物を持って帰り、心おどる冒険談を話して聞かせるのであった。

ヤコブは、思慮深く、忠実で用心深く、現在のことよりは将来のことを考えていたので、家にいて家畜の世話をしたり、土を耕したりして満足していた。母親は、彼の忍耐力、倹約の精神、先見の明などを高く評価した。ヤコブの愛情は深く強かった。そして、彼の物静かで根気強い思いやりの精神は、エサウの荒々しい、時おりの親切よりは、彼女により大きな幸福感を与えた。·····

ヤコブは、長子の特権が自分に与えられるという神の告示を母親から聞き、なんとかしてその特権を自分のものにしたいという言葉には表現できない願望に満たされた。彼が渇望したのは、父親の富を所有することではなかった。彼が願い求めたものは、霊的長子の特権であった。義人アブラハムのような神との交わりにはいり、家族のために犠牲をささげ、選民と約束の救い主の先祖となり、契約の祝福に含まれている永遠の嗣業にあずかることなどが、彼の熱心に求めてやまない特権であり、誉れであった。……

しかし、ヤコブは、このように現世の祝福よりは永遠の祝福を尊重はしたが、まだ彼の敬

う神について体験上の知識はなかった。彼の心は神の恵みによって新たにされていなかった。彼は、兄が長子の権利を保持するかぎり、自分に関する約束は実現し得ないと思った。そして、彼は、兄が軽視しても自分には非常に貴重なその祝福を確保しようと、絶えず策略をめぐらしていた。( 人類のあけぼの上巻 189―191)

2月24日

# よじれた価値

**「そこでヤコブはパンとレンズ豆のあつものとをエサウに与えたので、彼は飲み食いして、立ち去った。このようにしてエサウは長子の特権を軽んじた。」(創世記25:34)**

エサウは献身を好まず、宗教生活を送る気持ちがなかった。彼にとって、霊的な長子の特

権に付随した要求は、好ましくないというよりはやっかいな制限とさえ思われた。アブラハムと神との契約の条件であった神の律法は、奴隷のくびきのようにエサウには思われた。彼は放縦を好み、ただ自分の欲するままにふるまう自由を望むだけであった。彼にとって、権力と富、飲食と宴楽が幸福なのであった。彼は、なんの束縛もない奔放な流浪の生活の自由を誇った。(人類のあけぼの上巻190)

エサウのような人々が非常にたくさんいる。エサウは、自分の手の届くところにある特別貴重な祝福、すなわち永遠の始業、宇宙の創造主である神の命と同じ不朽の命、計り知れない幸福と栄光の永遠の重みをもっていながらも、あまりに長い間、食欲、情欲、生来の傾向にふけってきたために、永遠の事柄についての価値を識別し、正しく理解する能力が弱くなってしまった人々を代表している。

エサウはある特定の食物に対して、特別な強い願望を持っていた。そして彼は長い間自分を喜ばせることをしてきたので誘惑に負けないようにしようとは思わず、その魅力的な食物をどうやってでも食べようと決心した。彼は、食欲のカが自分を支配してしまうまで、自分の食欲を抑えるために特別の努力をしようとは思わなかったので、もしその特定の食物を食べることができなければ、非常に不都合なことが起こり、さらに死ぬかもしれないと想像した。このように考えれば考えるほど、ますます欲望がつのり、神聖な長子の特権がその価値と神聖さを失ってしまったのであった。(教会への証2巻38) エサウはそれを知らないで、生涯の危機を通過した。彼がほとんど考えるに値しない問題と見なした事が、彼の品性の顕著な特徴を露呈した行為であった。それは彼の選択を示し、神聖な、そして厳粛な思いで大切にすべきであった事柄に対する、彼の真実な評価を示した。彼はせつな的願望を満たすため、些細な道楽のために自らの長子権を売った。そしてこれが、彼の生涯を決定した。(SDA ﾊﾞｲﾌﾞﾙｺﾒﾝﾀﾘｰ［E・G・ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ］1巻1094，1095)

エサウは、無限の値をもって買われた、自分たちのものである特典を味わうこともなく、若干の食欲の満足感、あるいは利得のために自らの長子権を売ってしまった人たちを代表している。(同上)

2月25日

# 交換された長子権

**「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ、主はそれをなしとげ、」(詩篇37:5)**

イサクは、ヤコブよりもエサウを愛した。そして、自分の死ぬのもまぢかいと思ったイサクは、死ぬ前に祝福をあたえたいから、肉を料理して持ってくるようにとエサウにたのんだ。……イサクのことばをきいたリベカは、「兄は弟に仕える」と言われた神のみことばを思い出した。彼女はまた、エサウが家督権を軽んじてこれをヤコブに売ったことも知っていた。……

リベカは、イサクがエサウを偏愛していることを知っていたので、理屈では彼の目的を変えることができないものと信じこんでいた。彼女は、すべての事件の処理者である神に信頼しないで、ヤコブに父親を欺くように説きすすめて信仰の足りなさを暴露した。……

もしエサウが、長子にあたえられる祝福を父親から受けたとしても、彼に繁栄をあたえることができるのはただ神だけである。神はエサウの行為にしたがって、彼に祝福と繁栄をあたえることも、あるいは逆境をあたえることもおできになった。もし彼が、義人のアベルのように、神を愛し神を敬ったら、彼は神に受け入れられ祝福されたはずだった。もし悪人のカインのように、神を敬うことも、神の誡を守ることもしないで、自分の堕落した道を歩むのだったら、神から恵みを受けないで、カインのように神から捨てられるのだった。もしヤコブが正しい道を歩み、神を愛し、神を敬ったら、彼は一般に長子にあたえられる祝福と特権を手に入れなくても、神から祝福され、神の繁栄のみ手は彼とともにあっただろう。(生き残る人々107，108)

ヤコブとリベカは、目的を達したものの、彼らの詐欺行為によって得たものは、苦悩と悲哀だけであった。神は、ヤコブが長子の特権を得るであろうと言われたのであるから、神が彼らのためにそうしてくださるのを信仰をもって待っておれば、神の言葉は、神ご自身がよいと思われるときに達成されたことであろう。しかし、今日神の子であると公言する多くの人々のように、彼らはこの事を主の手にゆだねようとしなかった。リベカは、自分がむすこにまちがったことを勧めたことを非常に後悔した。これが、ヤコブをリベカから引き離す原因になり彼女は、ふたたび彼の顔を見ることができなくなった。(人類のあけぼの上巻194)

2月26日

# 苦い代価

**「彼はその後、‥‥涙を流してそれを求めたが、悔改めの機会を得なかったのである。」( ヘブル 12:17)**

ヤコブが父の天幕を去ると、すぐ、エサウがはいってきた。エサウは、長子の特権を売り渡し、その取り引きを厳粛な宣誓によって、確認はしたが、彼は、今弟がなんと言おうと祝福を獲得しようと決意した。長子の霊的特権には、物質的特権も含まれていて、家族の指導権と父の富の二人前が与えられることになっていた。彼が高く評価したのは、こうした祝福であった。……

エサウは、祝福が自分の手元にあると思ったときには、それを軽々しく評価したが、永久に彼から離れ去ったとなると、手に入れたいと思った。彼の衝動的で激しやすい性質がそのままあらわれ、彼の悲しみと怒りは大きかった。彼は、激しく泣き叫んだ。「父よ、わたしを、わたしをも祝福してください」。……

彼が軽率に手放した長子の特権は、ふたたび取りもどすことができなかった。「一杯の食」のため、すなわち、制することをしなかった食欲の瞬間的満足のために、エサウは長子の権利を売った。しかし、彼が自分の愚かなことを悟ったときには時すでにおそく、祝福を取りもどすことはできなかった。……

エサウは悔い改めるならば、神の恵みを求める特権がなくなったわけではなかった。しかし、彼は長子の特権を回復する方法をみつけることはできなかった。彼の悲しみは、罪を認めたことからではなかった。彼は、神との和解を願わなかった。彼は、罪の結果を悲しんだが、罪そのものを悲しまなかった。( 人類のあけぼの上巻 195，196)

悔い改めとは罪を悲しむことと罪を離れることを含む。人は罪の恐ろしさを知るまでは罪を捨てるものではない。心の中で全く罪から離れなければ、生活にほんとうの変化は起らないのである。

悔い改めの意味のほんとうにわかっていない人が多くある。罪を犯したことを嘆き、外面 的には改める人もありますが、それはその悪事のために苦しみに会わねばならぬことを恐 れるからである。しかしこれは聖書に教えられた悔い改めではない。彼らは罪そのものよりは、むしろ罪からくる苦しみを悲しむのである。エサウが家督の権を永久に失ってしまったと気づいた時の悲しみがそうであった。( キリストへの道 22，23)

2月27日

# 逃亡者に希望

**「時に彼は夢をみた。一つのはしごが地の上に立っていて、その頂は天に達し、神の使たちがそれを上り下りしているのを見た。」(創世記 28:12)**

エサウの怒りに生命をおびやかされて、ヤコブは逃亡者となって父の家を出た。しかし、彼は、父の祝福をたずさえていった。イサクは、契約の約束をヤコブにもう一度くり返し、彼がその相続者であるから、メソポタミヤの母方の家族のなかから妻をめとるように命じた。しかしヤコブは、深く物思いに沈んでさびしい旅に出かけた。彼は、ただ一本のつえをたよりにして、荒々しい遊牧の民の住んでいる原野を何百キロも旅しなければならなかった。彼は後悔と恐怖に襲われ、怒った兄につけられないように人目を避けていた。彼は、神が彼に与えようとされた祝福を永遠に失ったのかと恐れた。そして、サタンは、そばで彼を試みるのであった。……

絶望の暗黒が、彼の心におしかぶさり、祈ることすらできなかった。しかし、その極度の寂しさのなかで、これまでになかったほどに神の保護の必要を痛感した。彼は、涙を流して深く恥じ入り、罪を告白し、自分が全く見捨てられていないという確証を願い求めた。……

神はヤコブを見捨てられなかった。神のあわれみは、なお、罪深い不信のしもべに注がれていた。主はヤコブをあわれみ、彼が最も必要としていた救い主を示されたのである。

放浪者は旅に疲れ果てて、石をまくらにして地に横たわった。彼が寝ていると、一つの光り輝くはしごが地上に立ち、その頂が天に達しているのが見えた。このはしごの上を天使たちが上り下りしていた。その上のほうに栄光の主がおられ…た。……

ヤコブが目をさますと、あたりはまだ夜の静けさに包まれていた。幻の輝かしい光景は消えていた。さびしい山々の輪郭の上に星空が輝いて見えるだけであった。しかし、彼は、神が自分と共におられるという厳粛な感に打たれた。見えない臨在が寂しい場所に満ちていた。「まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった。……これはなんという恐るべき所だろう。これは神の家である。これは天の門だ」と彼は言った。(人類のあけぼの上巻 198 − 200)

2月28日

# 神ご自身のものを神に返す

**「またわたしが柱に立てたこの石を神の家といたしましょう。そしてあなたがくださるすべての物の十分の一を、わたしは必ずあなたにささげます。」(創世記28:22)**

重大な事件を記念するときの習慣に従って、ヤコブは神のあわれみの記念碑を立てた。それは、彼がこのあたりを通るときに、この神聖な場所にしばらく足をとめて主を礼拝するためであった。……彼は深い感謝の念をいだいて、神が彼と共におられるという約束をくりかえした。そして、彼は厳粛な誓いをたてた。「神がわたしと共にいまし、わたしの行くこの道でわたしを守り、食べるパンと着る着物を賜い、安らかに父の家に帰らせてくださるなら、主をわたしの神といたしましょう。またわたしが柱に立てたこの石を神の家といたしましょう。そしてあなたがくださるすべての物の十分の一を、わたしは必ずあなたにささげます」。

ヤコブはここで、神と取り引きをしようとしているのではなかった。主は、すでに彼に繁栄を約束しておられた。だからこの誓いは、神の愛とあわれみの保証に対する感謝として彼の心からあふれ出たものであった。ヤコブは神に感謝をいいあらわす必要を感じた。そして特別に神の恵みのしるしが与えられたならば、神に返礼すべきであると思った。それと同様に、われわれも、与えられるあらゆる祝福に対して、すべてのあわれみの源泉であられる神に感謝をあらわさなければならない。クリスチャンは、時おり自分の過去の生涯をふりかえってみて試練のときに支持が与えられ、暗黒と絶望のなかで道が開かれ、倒れるばかりのときに勇気づけられたことなど神から与えられた尊い救済の経験を思い出して感謝しなければならない。彼は、こうしたすべてのことを、天使の保護の証拠と認めるべきである。このような数えつくすことのできない祝福を思うとき、クリスチャンは、謙虚で、感謝の心をもって、「わたしに賜わったもろもろの恵みについて、どうして主に報いることができようか」と時おりたずねてみなければならない。

われわれの時間、才能、財産などは、これらの祝福をわれわれに委託された神にささげるべきである。われわれが特別に危険から救出されるとか、または、新しい予期しない恵みにあずかる場合には、言葉で感謝を表現するだけでなくて、ヤコブのように神のわざのためにささげ物や献金をして、神の恵みに感謝しよう。われわれは絶えず神の恵みを受けているのであるから、絶えずささげるべきである。(人類のあけぼの上巻 201，202)

(* 閏年のため福音の宝編集部にて追記)

# 忠実な羊飼い

**「ヤコブは彼に言った、『わたしがどのようにあなたに仕えたか、またどのようにあなたの家畜を飼ったかは、あなたがごぞんじです』。」(創世記 30:29)**

ヤコブの働きは勤勉で忠実であった。…羊飼いは、昼も夜も群れを守っていなければならなかった。羊の群れは盗まれるおそれがあった。また、数多くのどうもうな野獣に襲われる危険もあり、よく見張っていないと群れが襲われ、大きな損害をこうむるのであった。ヤコブの下で多くの羊飼いが働いていて、ラバンの広範囲にわたる群れを養っていたが、彼自身がすべての責任を負っていた。一年の中のある期間は、彼自身が群れといつもいて、乾燥期には群れがかわいて死なないように、また最も寒い数か月の間は、群れがひどい夜の霜にこごえないように守らなければならなかった。…

キリストは、ご自分と民との関係を羊飼いにたとえられた。人間の堕落後、キリストはご自分の羊が、罪の暗い道で滅びる運命に陥ったのを見られた。彼は、これらのさまよう人々を救うために、天の父の家の誉れと栄光とを捨てられた。「わたしは、うせたものを尋ね、迷い出たものを引き返し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くし」「それゆえ、わたしはわが群れを助けて、再びかすめさせず」「地の獣も彼らを食うことはない」(エゼキエル書 34:16, 22, 28) 。「昼は暑さをふせぐ陰となり、また暴風と雨を避けて隠れる所」である彼のおりに群れを導く彼の声が聞こえる ( イザヤ書 4:6) 。彼は根気強く群れを守られる。彼は弱いものを強め、苦しみを和らげ、腕に小羊をだき、ふところに入れてたずさえられる。羊は彼を愛する。「ほかの人には、ついて行かないで逃げ去る。その人の声を知らないからである」( ヨハネ 10:5) 。キリストは言われる。「わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。羊飼ではなく、羊が自分のものでもない雇人は、おおかみが来るのを見ると、羊をすてて逃げ去る。そして、おおかみは羊を奪い、また追い散らす。彼は雇人であって、羊のことを心にかけていないからである。わたしはよい羊飼であって、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている」( ヨハネ 10:11-14) 。

大牧者キリストは、彼の牧者たちに、彼の下で働く羊飼いとして群れの世話をすることをゆだねられた。そして、ご自分が持たれた同じ関心を彼らも持って、主からゆだねられた任務の清い責任を感じるように命じられる。…キリストは羊を救うために、ご自分の命を捨てられた。(人類のあけぼの上巻 206-208)

研究 1

わたしたちが信仰の一致に到達するまで

# 「一つであるように」

まもなく祭司としての働きを開始しようとしておられたイエスが、この世に残していく弟子たちのために祈られたのは、御父とご自分が「一つであるように」「彼らが完全に一つになる」ようにということでした。それは、御父よりご自分に賜わった人々がご自分のいる所に「一緒にいるように」なるためでした。そのために繰り返し「一つになる」ようにと祈られたのです。

再臨信徒は、イエスが戻ってこられてご自分のおられる所へ自分たちも「一緒にいるように」連れ帰ってくださることを切に待つ者です。では、どのように「一つになる」とき、わたしたちはイエスのおられる所へ行くことができるのでしょうか?

「わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである」(エペソ 4:13)。

今なお天で「父よ、あなたがわたしに賜わった人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい」と祈って下さるイエスの祈りを覚えながら、今回より「わたしたちが信仰の一致に到達するまで」をテーマに学んでいきます。

「神の子を信じる信仰の一致」と「彼を知る知識の一致」、これによってついに「キリストの満ちみちた徳の高さにまで至る」ようになりますが、この一致、すなわちキリストの信仰の一致とキリストの知識の一致は、そのみ言葉を聞くことによってのみ達成されます。しかし、次のように警告されています。

「主なる神は言われる、『見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくのでもない、主の言葉を聞くことのききんである。彼らは海から海へさまよい歩き、主の言葉を求めて、こなたかなたへ

はせまわる、しかしこれを得ないであろう』(アモス 8:11, 12)。

主の言葉の飢きんではなく、「主の言葉を聞くことの」飢きんとあります。ですから、わたしたちは今の時を非常に大切に考える必要があります。み言葉が聞こえている「今は恵みの時、今は救いの日」なのです。そして、飢きんに備えて、今聞こえるみ言葉一つ一つを取りこぼすことなく思いと心に蓄え、そのみ言葉によって生きる必要があります。

では、この飢きんはいつ起こるのでしょうか。み言葉には、第三天使のメッセージが終わり、イエスが聖所から出られた時について、次のように記されています。

「神のみことばを尊んでいなかった人々が、海から海へ、北から東へとさすらいながら、神のみことばを求めて、あちらこちらへと急いでいた。天使は言った。『あの人たちは、神のみことばを見つけることができない。地にはききんがある。それは、食物に飢え、水にかわくききんではなくて、神のみことばを聞くことのできないききんである。彼らは、神からただ一言のおほめのことばをいただくことさえできるなら、何ものも惜しまないだろう。しかし彼らは飢え渇きつづけねばならない。彼らは来る日も来る日も救いを軽んじ、天の宝や勧めよりも、この世の富やこの世の快楽を大事にしていた。彼らはイエスをこばみ、彼の聖徒たちをあざけった。けがれたものはいつまでも、けがれたままなのだ』と。」(初代文集 454,455)。

み言葉がなければ、「けがれたものはいつまでも、けがれたままなのだ」。つまり、「キリストの徳の高さにまで至る」ことはありません。「神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致に到達」することもありません。これが、「主の言葉を聞くことのききん」です。しかし、この飢きんはいつ始まったのでしょうか? つまり、彼らが「主の言葉を聞くこと」をしなくなったのはいつでしょうか?「彼らは来る日も来る日も救いを軽んじ」。み言葉が手元にあっても、聞かないならば、それは飢きんです。つまり、「み言葉が聞こえなくなるとき」が、その人にとって恩恵期間の終わりであり、み言葉を聞くことの飢きんなのです。これは、例えばユダヤの時代にも起こったことでした。彼らは聖書を持っていましたし、安息日ごとに会堂へ行きましたが、み言葉を聞くためには、イエスのみ許へ来なければなりませんでした。なぜなら、そこでなければみ言葉が聞けなかったからです。

このみ言葉を聞くことの飢きんは、パンの飢きんよりも深刻です。なぜなら、パンは胃に入り、一時的な命を支えますが、主のみ言葉は頭と心に入り、永遠の命のために必要だからです。そして、使徒パウロは次のように勧めました。「今生

れたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。それによっておい育ち、救に入るようになるためである」（ペテロ第一 2:2）。

主の言葉を聞くことの飢きんは、主の言葉が全く聞けなくなることによって生じるばかりではありません。「混じりけのない」、つまり純粋なみ言葉を聞くことができなくなる時に起こります。

「『夢をみた預言者は夢を語るがよい。しかし、わたしの言葉を受けた者は誠実にわたしの言葉を語らなければならない。わらと麦とをくらべることができようかと』と主は言われる」（エレミヤ 23:28）。

穀物を食するときに、わらやもみ殻が混じっていたら、どうでしょうか？わたしたちの永遠の命に関わる「主のみ言葉」に関してはそれ以上に混じりけのないものを求める必要があります。主の言葉に、それ以外のものが入ってはならないのです。しかし、次のように記されています。

「御霊は徐々に、しかし確実に地から引き上げられつつある」（教会への証 9 巻 11）。聖霊によって導かれる使命者が少なくなると、混じりけのないみ言葉を聞くことがますます難しくなります。なぜなら、「神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。ところが、わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜わった恵みを悟るためである。この賜物について語るにも、わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いないで、御霊の教える言葉を用い、霊によって霊のことを解釈するのである」（コリント第二 2:10-13）。

言葉は思想を伝えるためのうつわです。つまり、主のみ言葉を聞くということは、主の思想を聞くことを意味しますが、御霊によらなければ、主の思いを知ることはできません。そのとき「人間の知恵が教える言葉」が入り込みます。しかし、混じりけのない主の言葉だけが、エペソ 4 章 13 節の約束、すなわち「神の子を信じる信仰の一致」と「彼を知る知識の一致」、ひいては「キリストの満ちみちた徳の高さにまで至」らせることができるのです。

ですから、エペソ 4 章は、御霊の賜物を受けた人々に対して語られています。「御霊も一つである」「聖霊による一致を守り続けるように努めなさい」「そこで、こう言われている、『彼は高いところに上った時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜

物を分け与えた』。」（エペソ 4:4, 3, 8）。つまり、エペソ 4:13 にある「わたしたちすべての者」とは、この賜物を受けた者を指しています。

なぜ、「神の子を信じる信仰の一致」と「彼を知る知識の一致」が大切なのでしょうか。

信仰は神のみ約束を受け取る手であり、「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない」（ヘブル 11:6）。そして、彼を知る知識は、その人を「義とし」ます（イザヤ 53:11）。「しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」（ヨハネ 1:12）。つまり、真に彼を知る知識を得ることができるのは、彼を「受け入れる」ことによってのみです。なぜなら、受け入れるときに、神の子となる力を受けるからです。また「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神（彼）は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」（ヨハネ第一 1:9）。

彼、すなわちキリストは、罪をゆるし（義認）、すべての不義からの清めてくださいます。そしてこの清め（cleanse）こそ、今、キリストがわたしたちのために働いておられる贖罪の日の目的そのものです。「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」（レビ記 16:30）。そして、この贖罪の日の働きは、「至聖所のために、…また会見の幕屋のためと、祭壇のために、…また祭司たちのためと、民の全会衆のために」及んでいます（レビ記 16:33）。

ですから、「彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする」（ヨハネ第一 3:3）。この望み、すなわち彼に似る者、神の子となる望みをいだいている者は皆、彼を受け入れることによって、「彼がきよくあられるように、自らをきよくする」力を受けるのです。

さらに、「罪を犯す者は、悪魔から出た者である。悪魔は初めから罪を犯しているからである。神の子が現れたのは、悪魔のわざを滅ぼしてしまうためである」（ヨハネ第一 3:8）。悪魔のわざを滅ぼしてしまうことは、災いをなくすことによってではなく、神の子をすべての不義からきよめることによってなし遂げられます。ですから、他のことに気を取られることなく、今も天の聖所で祈ってくださるイエスの祈りと働きに集中して、わたしたちもこのお方と完全に調和して働きましょう。

次回より、この思想を基調として、1）いのちの目的、2）到達すべきわたしたちの目的、3）別の助けという三つの観点から学んでいきます。

(44 ページの続き)

ピラトはイエスさまに有罪を宣告するという責任から逃れようとしましたが、むだでした。彼が最初の時点ですみやかにそしてきっぱりと、自分の正しいと確信するところを実行していれば、彼の意志が暴徒に圧倒されることはなかったはずでした。彼らが大胆にもピラトに命じるようなことはなかったはずでした。

彼のぐらつきと優柔不断は自身の破滅となりました。彼は自分自身の地位と名誉を保持しながら、イエスさまを釈放することはできないことがわかりました。

彼は自分の世俗的な権力を失うよりはむしろ、無実な命が犠牲になるほうを選びました。暴徒の求めに屈し、彼は再びイエスさまをむち打ち、そしてこのお方を十字架につけるために引き渡しました。

しかし彼の用心にもかかわらず、まさに彼の恐れていたことが後に彼の身に起こりました。彼は名誉をはぎとられてその高い地位から追われました。そして、キリストの十字架の後まもなく、悔恨と傷つけられた誇りに苦しみながら、自らの命を絶ったのでした。

このように、罪と妥協するすべての人が得るものは悲しみと破滅だけです。「人が見て自ら正しいとする道でも、その終りはついに死に至る道となるものがある」( 箴言 14:12)。

ピラトが、自分はキリストの血について責任がないと宣言した時、カヤパは挑戦的に「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」と答えました ( マタイ 27:25)。

そしてこの恐ろしい言葉は祭司たちによって繰り返され、そして群衆によってふたたび繰り返されました。

それは自分たち自身の上に下した恐るべき宣告でした。それは自分たちの子孫に残した恐るべき遺産でした。

文字通りおよそ 40 年後に、このことはエルサレムの滅亡の恐ろしい場面の中で彼らの上に成就したのでした。

文字通りそれはその日以来、彼らの子孫が散らされ、軽蔑され、虐げられるという状態において成就しました。

最後の決算が来るときに、それは二重に文字通り成就することになります。そのときには光景が変わり、そして「このイエスは」「炎の中で‥‥主を認めない者たち‥に報復」しに来られます (使徒行伝 1:11、テサロニケ第二 1:8)。

その時、彼らは岩と山に向かって願うでしょう。

「さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ。御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ」( 黙示録 6:16, 17)。

# 里芋のきんぴらお焼き

■材料

| | |
|---|---|
| 里芋 | 20 個 |
| 昆布だし（顆粒） | 小さじ 1 |
| 塩 | 少々 |
| 人参 | 1/2 本 |
| ごぼう | 10 センチ |
| しょう油 | 小さじ 1 |
| 粗糖 | 小さじ 1 |
| 昆布だし | 小さじ 1 |

■作り方

1. 里芋の皮をむいてゆでます。
2. 人参を縦に 6 等分して、1 ミリほどに切ります。
3. ごぼうを縦に 4 等分して、1 ミリほどに切ります。
4. ゴマ油（分量外）で炒めて、粗糖としょう油を加えます。
5. 里芋がゆだったら、水を切って、マッシュします。
6. 里芋に炒めた人参とごぼうを入れて、昆布だしと塩を加えてよく混ぜます。
7. 6 の里芋を厚さ 1 センチほどにまるめて、ごま油をしいたフライパンで両面を焼いて、できあがり。

パン粉をつけてコロッケにしてもおいしいです。

## 教会プログラム ( 毎週土曜日)

安息日学校：9:30-10:45（公開放送）

礼拝説教：11:00-12:00（公開放送）

午後の聖書研究：14:00-15:00

【公開放送】http://www.4angels.jp

## 聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先：〒 350-1391　埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係

是非お申し込み下さい。

## 書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。

【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。

イエスの物語

# 第 47 話

## ピラトによる有罪宣告（II）

神の御子は、あざけりの衣といばらの冠をつけて立っておられました。腰まで衣をはがされたその背中は残酷なむちの跡が尾を引いていて、そこから血がとめどなく流れていました。このお方のお顔は血に染み、疲労と苦痛の跡があらわれていましたが、この時ほど美しく見えたことはありませんでした。そのお顔つきの一つ一つがやさしさと忍従と残酷な敵に対する最もやさしい同情とを表していました。

このお方のかたわらの囚人はこれとは著しく対照的でした。バラバの顔つきのどの線も、彼がまさしく手におえない悪党であることを表していました。

見ている者の中には、イエスさまに同情する者もいました。祭司や役人たちでさえ、このお方がご自分の主張された通りのお方であることを確信しました。しかし彼らは屈服しようとしませんでした。彼らは暴徒たちを気違いじみた激情へ駆り立てました。そして、ふたたび祭司たち役人たち、そして民衆が「十字架につけよ、十字架につけよ」と叫びました。

ついに彼らの不合理で、復讐的な残酷さに忍耐力を失い、ピラトは言いました。「あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない」（ヨハネ 19:6）。

「もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王とするものはすべて、カイザルにそむく者です」（同上 12）。

これはピラトの急所をついていました。彼はすでにローマ政府から疑われていたので、このような種類のうわさをたてられたら自分の身の破滅であることを知っていました。

「ピラトは手のつけようがなく、かえって暴動になりそうなのを見て、水を取り、群衆の前で手を洗って言った、『この人の血について、わたしには責任がない。おまえたちが自分で始末をするがよい』」（マタイ 27:24）。

（41 ページに続く）